

PARTICLE



デザート
姉妹
目目
和和

りりくる Pure Dessert
Lily Lyric cycle
Rainbow Stage!!!

りりくるRSPD制作プロジェクト 第1弾クラウドファンディング

F エターナルダンゴムシノモンシロチョウコース リターン ぶみや書き下ろしSS



■りりくるRSPD制作プロジェクト第1弾クラウドファンディング

F エターナル ダンゴムシ/モンシロチョウ コースリターン ふみや書き下ろしSS

『デート日和、姉妹日和』

「あ、おはよお、真優〜」

「……おはよ、真衣」

あくびをかみ殺しながら部屋を出ると、ちょうど同じタイミングで部屋から出てきた真優とご挨拶。

毎朝のことながら、まーた髪ぼさぼさなんだから。

「今日は自分で起きたね！」

「ばかに、しないでよ……変な起こし方されるくらいなら、自分で起きた方がマシ……」

「あはは、相変わらず朝弱いよね。テンション低い」

「うるさいわね……あんたが高いのよ……ふぁ……」

「そっかなあ……？」

でもまあ、そういうフラフラしてたり、だらしなかったりする感じ、外じゃ見られないから、役得というか、妹得、みたいなの……？

「まあいいや。ほら、こっちおいで〜。寝癖直してあげる」

「先に自分の直しなさいよ……」

「えー、じゃあ真優がやって〜」

「なんでそんな無駄なこと、毎朝やるのよ……別にいいけど」

「んふふ〜」

真優の髪に触れるのも、真優に触れてもらうのも、なんか好きなんだよね〜。

毎日の、この何気ない感じが落ち着くっていうかさ。

「ありがと、お姉ちゃん〜」

「はいはい……」

「……なんか、改まって言うと、恥ずかしいね！」

「なによそれ……そんなこと言われたら、こっちまで恥ずかしくなるでしょ……」

「えへへ、それはそれでいいかも」

「まったくもう……」

そんなやり取りをしつつ、顔を洗ってさっぱりしたら、お互いに、相手が歯磨きをしてる合間を使って、髪を梳かしてあげる。

って、よく考えたら、あたしの方がやってもらう時間は少ないのに、やるのは大変なんじゃない……？



でもまあ、真優の髪、長く触っていられて思えば、アリだね。

「うん、よし、今日も美人だね」

「知ってる」

「朝ご飯、何がいい？」

「なんでもいいわ。任せる」

「パンかご飯か！」

「……あんたは？」

「あたしは、ご飯かな」

「じゃあパン」

「えっ、そこはあわせてくれるとこでしょ」

「そういう気分なのよ」

「ちえり、手のかかるお姉様なことです」

……なくんて言いつつ、いつも思う。この時間、このやり取り、大切だなんて。

二人で過ごすこと全部、当たり前のことだし、ずっとそう思ってたことだけ……。

気持ちを確認合合つてからは、その当たり前が……その当たり前を確認することが、大好きって気持ちを強く感じさせてくれるというか。うん、そんな気がするっ。

「……どうしたのよ、ぼーっとして。まだ寝ぼけてる？」

「あ、うん、なんでも。っていうか、ちゃんと起きてるよっ」

「ふふ……ならいいけど」

「も。んじゃあ、待ってて、すぐ準備するからっ」

「ええ、待ってる」

*

「♪」

「……なによ、何か嬉しいことでもあった？」

学校に向かう道すがら、真優が不審そうな目を向けてくる。

ああ、でも、割といつも睨まれてるかも。なんか慣れちゃってた。

「いや、こうやって真優と一緒に学校行けるってさ、なんかいいなって」

最近と一緒に登校しても怒らないっていうか、むしろ嬉しそうっていうか。

ふふ……前なんて、一緒に行くのあんなに嫌がってたのにな。

「なにそれ、安上がりね。それくらい普通でしょ」



「その普通がいいんだよ」

「そ。まあどうでもいいけど」

「真優はそうじゃないの？」

「別に……そうじゃないこともないわけでもないけど……」

「ええ、どっちどっち。そこ大事なんだけどなあ、真優ってばも……あ、そろそろ学校だから、お姉ちゃんって呼ぶね。お姉ちゃんってばも」

「いちいち確認しなくてもいいわよ、それ」

「でもさ、気持ち切り替えとかなないと、うつかり呼んじやいそうだし」

「どっちでもいいけど。好きにすれば」

「そう……？ でも、学校で真優って呼ぶと、やっぱりさ」

「何かまずいわけ？」

「ほら、まわりのみんなが、3年生の先輩呼び捨てにしてるぞ！ ってなるかなって。ざわついちゃうでしょ」

「……そうかしら」

「真優のファンとか気にするかもだし！」

「そんなの、いないし……そういうのは、あんたの方がいるでしょ」

「え？ まあ、大会の応援に来てくれる子とかいるし、そういうのは嬉しいけど。差し入れくれたりもするし」

「ほら」

「いや〜でも、うちの姉はモテるんですよ、学校では」

まあ、最近は近寄りがたさがなくなった、みたいに噂されてる時もあるし。うんうん、わかるわかる。

師匠と一緒に図書室で本の話をしてる時なんか、絵になるんだよね。

「それは、そっくりそのまま返すけど」

「ん〜、そういうの、ありがたいなって思うし、嬉しいんだけどさ……あたしはやっぱり、褒められるなら真優から褒められたいし！」

「ふ〜ん……そういうもの？」

「そういうもの。だから、気にしないでほしいっていうかさ」

「それなら、私の方だって気にしなくていいのに」

「そう……？ じゃあ……真優……？」

「もう、だから確認しなくていいわよ」

「いつそ……真優ちゃん、って呼ぶ？」

「なっ……あのねえ、余計にあれでしょ……普段そんなふうに呼ぶことないし」
「昔はそうだったでしょ」



「今は今でいいの」

「ふん……」

そんなことをあれこれ話しながら歩いていたら、あつという間に学校近くの交差点。

「おっつす、真衣〜」

「あ、彩愛ちゃん、陽奈ちゃん。おはよー」

「おはよう〜椎名さん。椎名先輩も、おはようございます」

「ええ、おはよう、瀬川さん、若宮さん」

「……んへへ」

「……なによ」

「んーん、なんでもっ」

出た出た、いつものやつ、って思って、ついにやにやしちやう。

でも、たまに思うんだよね……学校での猫被り、そのまま保ってほしいような、でもみんなにバラしちやいたいような……なんてこと。

どっちの真優もいいと思うんだけどな〜。

「なんだよ〜、真衣と真優先輩、なんか最近特に仲いいよね」

「え、そっかな〜、へへへ」

「ま、あたしと陽奈ほどじゃあないけどねっ」

「へへへ〜、いやいや〜」

「もう、なにだらしない顔してるのよ、みつともない……」

「ああ、ごめんごめん。んじゃ、教室行くね」

「ええ」

「また後で……真優ちゃんっ♪」

「んなっ……!! んもう……急にそういうこと言われたら、ドキッとするでしょ……っ」

「そう? やったあ」

「……そういうの、他の誰かに、しないでよ……」

「えっ、しないよ、そんな恥ずかしいこと」

「恥ずかしいって、もう……中身脳天気なのに、自然にそういうことしてくるんだから……」

…自分がどんなふうに見られてるか、ちよつとは自覚しなさいよね」

「そういうこと言うなら真優だっさ〜」

「むう……いいから、行きなさいよっ」

「はーいっ」

「ふん……」

照れてる。そっぽ向いて、ちよつと唇尖らせちやったりして。ツンツンしてるのにかわいいとか、反則だよね。



もうちょっと見てたいけど、まあ、また後のお楽しみってことで。

*

「ふっふふ♪」

それにしても、朝から真優と仲いいって言われちゃうと、なんか気分いい！
教室入ってから、ついそわそわしちゃう。

何か他のこと考えて落ち着かないとな……。

「あっ」

「そうだ……！」

真優のことデートに誘う計画立てよう……！

せっかくのこの気持ちがホットなうちになにかやりたいし、思い立ったが吉日っていうし！

「ん〜、そうだなあ〜……」

「……どしたの真衣。授業そんなに楽しみ？」

「ん？ ああ、お姉ちゃんのこと考えてた。どうしたら喜んでもらえるかな〜って」

「なんだよ、よくできた妹かよ」

「椎名先輩のことは、椎名さんが一番わかってそうな気がするけど」

「いや〜、そう？ そうかな〜、いやそれほどでも〜、へへへ」

「なんなんだ……」

デート。うん。それも、普通についていうんじゃないで、サプライズ的な？ うんうん、

おもしろそうっ♪

たまにはそういう感じもいいよね。普通のデートでも、ちょっとやり方を変えると、なんかワクワクする〜！

「……今日の真衣、なんかいつもよりゆるゆるだよね」

「しっ。瀬川さん、声が大きいわよ……」

「でも、彩愛ちゃんの言う通り、いつもはもう少しキリッとしてるような……？」

「楽しみなことでもあるんじゃない？ そんな日だってあるわよ」

「へ〜、アリスってばクールう〜」

「そんなじゃないしっ。それよりほら、チャイム鳴ったわよ。授業始まつちゃう」

「あっ、やばっ、んじゃ教室戻るね〜！」



*

「あ……」

終業のチャイムではっと我に返って、また自分がぼんやりしていたことに気付く。

「……はあ……」

もう何度目なのかわからないため息を送り出しつつ。だけど別に、嫌な気分ってわけでもなくて。

今朝真衣に言われたことが、今日一日ずっと気になって、ちょっと色々上の空だったかも。

「……真優ちゃん……」

なんとなく、呟いてみる。

自分で言っても、特に何とも思わないんだけど……なんなのかしら。

真衣にそう呼ばれるの、子供の頃以来だから、ちょっと慣れないってだけ……？　こんな些細なこと、意識しすぎ……？

だけど、このことを思い出す度に、にやついちやいそうになるの、我慢するので大変だったんだから……。

まあいいわ。今日は帰ったら、何か言ってやらないとね。このままじゃ、なんだか気が済まないし。

でも真衣ってば、こういう類の話をして、恥ずかしがるより喜ぶ感じなのよね……むう……そこはいつも、ちょっと負けた気分……。

そもそも、いつも真衣のペースっていうか、調子に乗ってるっていうかつ。

まあ、色々フォローしてくれたり、リードしてくれたり、嬉しいし、助かってるんだけど……。

でも何か、私の方から真衣にしてあげられて、ついでにちょっとびっくりさせられるよな何か……。

「はっ……」

そうだよ……！

たまには私の方から、真衣をデートに誘ってみるっていうのはどうかしら。

普段あんまりそういうことしてないし、きつと身構えてなくて、びっくりするわよね。

うん、そうよね、ある意味サプライズっていうか、そういう方向性で誘ってみるのもアリよね……！

たまには、そういう感じも、楽しいだろうし……。



「んん〜……」

でも、せっかくならいいい感じに誘いたいし、どうしようかしら……。

「……椎名さん、何か考え事？」

「えっ……あ、ああ、高月さん」

「もうホームルーム終わったよ」

「そ、そうね、ええ、ちよつと夕日が眩しくて、ぼーっとしちやつてたみたい」

「……真衣くんのこと、とか？」

「えっ、なつ、べつ、別にそんな、そういうわけじゃ……」

さすが高月さん、鋭い……！

それとも、私がわかりやすすぎるだけなのかしら……。

「うへ〜、忍術こわ〜。心読まれちゃう〜」

そこへ、高月さんの後ろから抱きつくように、桜庭さんがやってくる。

二人とも、仲いいわよね。高月さんは相変わらず冷静な感じだけど……これは、照れる顔なのかしら……？

「もう、やめてよ遊乃……変な誤解されちゃうでしょ」

「だ、大丈夫よ、誤解なんて……」

「ほら、大丈夫だつてさ、よかったねっ。てか、それよりさえちゃん、今日はこれからどうする〜？」

「珠季先生のところ。勉強教えてもらう約束してるから」

「えっ！ あたしは！？」

「え、来る？」

「行く行くっ、ていうかあたしの方が成績やばいし！」

「遊乃……私たち受験生なんだから、それはどうなの……」

「そんなこと言っただつてえ〜！」

そう言っただつたばたしながら、高月さんへと更に強く抱きついていく桜庭さん。高月さんは、抵抗しないのかしら……？

「あ……椎名さんは、どう、かな……？」

「え、私？ そ、そうね……まだ一応、少しでも部活に顔を出す予定だし、今日は帰ったら、真衣の宿題を見てあげる約束もしてて」

「そっか。忙しそうだね」

「てか、勉強会なんて必要ないじゃん。真優ちゃんも、ちよ〜う成績いいもんね〜」

「えっ……そんなことは、ないと思うけど……」

「遊乃は、人のことひがむ前に、自分で勉強頑張ろうね」

「へあ〜い……」



「じゃあね、椎名さん。また明日」
「ええ、また明日」

……結局、ずつと桜庭さんにくつつかれたままだったけど、高月さん、全然平気そうね。むしろ楽しそうというか。

私も真衣とあれくらいの距離でいちゃ……じゃ、なくてつ。

「……………」

クラスメイトに、真優ちゃん、つて言われても、別になんともないのよね……。真衣に言われるのと、何か違うっていうか。

やっぱり、真衣に言われるから、特別なふうに感じちゃうのかしら……。

ていうか、受験生……そうよね。

真衣のことだから、きつとそういうところ、ちゃんと気を遣ってくるだろうし。

こっちから、気にするなって、釘を刺しておかないとね。

「さて、と……」

でもとりあえず、ちよつとだけ美術室に顔を出してから、考えようかしら。

なんだか微妙に、嫌な予感がするし……。

*

「あら真優さん、お呼びでしょうか！」

「いえ、全然呼んでませんけど……」

美術室のドアを開けると、何故だかそこにいる疑似メイド。

今日は私服の上にエプロンをまとうつて……まあ、要するに、大学からここまで直行してきたってことみたいね。

いつも思うんだけど、そのエプロン、必要かしら……。

「織部先輩、なんでいるんです……いえ、大体わかりますけど」

「あらあら、うふふ」

「いえ、やっぱり全然何もわかりません」

「あ、あらあら……」

いちいちちゃんとリアクションとってくれるんだから、律儀な人よね。

黙っていれば、もう少しまともに見えるのに……。

「とうか、なんで私のところに来るんですか」

「以前にも、こうして美術室でお互いの悩みを打ち明け合ったりしましたよね！ その流



れといえますか」

「え、知りませんけど」

「えっ、ちよっ、割と大事なシーンでしたよね。ていうか、こういうお話、前にもしま
せんでしたっけ……」

「ああ、記憶喪失か何かですか？」

「あ、あの、真優さん……私のメンタル、言葉のやんちゃを無限に耐えられるわけではな
いんですけど……」

「ふふっ、どこまでが許容範囲なのか、知っておきたくて」

「くっ……後輩に求められる私……先輩として、身体を張らないわけには……っ」

「……はあ。まあ、冗談はこれくらいにしておきますけど」

「えっ、割と真に迫っていたような……あ、それよりも、部活ですよ。どうぞどうぞ」

「いえ、いいです。やっぱり私、帰りますから」

「ああん、今来たばかりじゃないですかあ！」

「ここで先輩を引き留めておくわけにもいきませんし」

「え……？」

「……早く玖雅山さんのところに行ってあげたらどうです」

「はっ！ そうでした！ お嬢様をお迎えに来たんでした！」

まったく、わざとらしいというかなんというか……。

「それでは〜！」

言うなり、さっと走り去っていく。

その足取りはは軽やかで。若干、ほんのちよっつと、名残惜しくないこともない。

「……はあ、もう……先輩なんだから、どうせ様子を見に来てくれるなら、もう少しスマ
ートにして欲しいものよね……」

「えっ、もしかして褒められましたっ？」

「戻ってこなくていいですからっ！」

ホントもう、めんどくさい人っ。

*

「真優、今日の夕飯、どうだった？」

「ごうかく〜」

「えへへ、よかったっ。食後のお茶、今日紅茶？ それともコーヒーがいい？」



「んー……ふぁ……」

「……へへ」

「なっ……見た……?」

「あくび、かわいいよ」

「そ、そういう問題じゃない……っ」

「なんにも問題じゃないよ」

「うるさいわね……」

うう……家でいると、どうしても油断しちゃう……。

確かに最近、受験用に課題の量を増やしたりしてるから、ちよつと疲れてるっていうのはあるかもしれないし……。

真衣が傍にいるから、安心するっていうのも、あるかもだけど……。

「じゃあ、コーヒーにするね」

「うん……」

言いつつ、手慣れた所作で、ふわりと湯気を立てるマグカップを、そつとテーブルに置いてくれる。

かけてくれる声は穏やかで……なんでもない仕草まで、なんだか優しい。

「……ね、真優」

「ん……?」

「やっぱ3年生って、授業とか大変? 受験とかもあるし、さ……」

ほら、やっぱり。私のことばかり気にするんだから。

「別に……そこまでじゃないけど」

「……そっか」

で、まっすぐこつち見ない。何かまた、慣れないことでも考えてるのかしら。

「……あのさ」

「うん……」

「今週の土曜日さ……一緒にお出かけとか、しないかなって」

「え……」

ちよつと……その日は、真衣のこと、デートに誘おうと思ってた日なんだけど……。

「えっと……その日は一応、予定があるのよね……」

「あ、そ、そうなんだ……」

「……何か、あるの……?」

「ううんっ。そ、そうだよね、やっぱ真優、色々忙しいよねっ。んじゃあしょうがない、あたし一人で遊びに行くてくるか……」

「むっ……」



「えっ、ごめん……だめだった……？」

「そういうこと、言わないでよ……私のこと、放っておくとか……」

自分でも、わかってる。わがままだって。

気遣われたら、いらないうって思っちゃうけど、それが無いなら、欲しくなる。

でも、こんなこと言えるのは、真衣にだけ……。

「それは、だって……真優のためについて思ったから、だから、気にしてないような感じにしていたのに……」

「どういうことよ……」

「だから、その……真優、あたしに変な気遣いさせないようにって、思うだろうなって……

……でも、先にそれ言っちゃったら、臍曲げちゃうかなって、思って……」

「むう……」

……気に入らないけど、当たってるかも。

「そんなの……あなたがまた、私のことばかり考えて、無理とかするの、嫌だから……」

「無理じゃないしっ、あたしは嫌じゃないよっ」

言いながら、ぐっと詰め寄ってくる。

どんなことでも、いつでもその目は、真剣で……。

「真優のこと、考えさせてよ……」

「真衣……」

なんとなく、そういう感じなんじゃないかって、思ってたけど……。

「じゃあ……今のお誘い、ホントは、どうしたかったわけ……？」

「あ、その、いつもとちよつと違う感じでさ……なんにも伝えずに呼び出して、サプライズデートにしよう、って思って、計画立ててただけ……」

「……私も、その日……真衣のこと、誘おうと思ってたから……同じ感じで……」

「えっ、そうだったの？」

「なによ、そういうこと……」

「なんていうか……変なところ、似ちゃったのかしらね。」

「なんだ、被っちゃったか……なんか、ごめん……」

「別に、謝るようなことじゃないけど……」

「いやその、真優のことだからきつと、あたしのこと驚かせようと思って、ワクワクして

たんだろうなく、とか、サプライズが成功した時の真優のドヤ顔、きつとかわいいんだろ

うなく、とか」

「あんたねえ……」

どっちかっていうと、そうなんだけど……まんま言い当てられるのは、やっぱり癪って

いうか……もう……。



「あはは……お互い、わかりすぎちゃうっていうのも、なんかあれだね」

「……まあ、でも、わからないよりはいいでしょ」

「うん……そっか」

「……ふふ」

「やっぱ、ごめん」

「いいの、ありがとう。嬉しい」

「あたしも。でもなんか、不安にさせちゃったね」

「いいわよ、私はそれで」

「え……？」

「だって、絶対、またこうして寄り添いあえるんだから。そうでしょ？」

「……うん、そうだね。そうだった」

「それでいいし、それがいい。」

「そういう毎日、一緒に過ごしていきたい。」

「えへ……じゃあ、オッケーってことだね。週末、楽しみだねっ」

「ええ、そうね」

もう、こうなるってわかっているから、全然平気。大丈夫。

少しくらい大変なことがあったとしても、ちっともそんなふうに感じない。

すれ違いなんて、とつくの昔に通り過ぎているんだし。

真衣のちよっとはにかんだような笑顔が、そう思わせてくれるのよ。

*

「おおく、広いね！」

いつもよりちよっとおしゃやれして、いつもよりちよっと遠出してきた、賑やかなショッピングモール。

やっぱり休日だから人通りは多いけど、二人でちゃんと手をつないでいれば、問題なし。

「で、どういうプランだったわけ？」

「真優の方は、なんだったっけ？」

「そっちから言いなさいよ」

「ええ、恥ずかしいなあ」

「どうせ今から実践するんだから、隠すことないでしょ」



「それはそうなんだけども……」

「まあいいわ。はやく行きましょ」

「うんっ」

結局のところ、二人分のデートをあわせて、合体デートをやるう、ということになったわけ。

でも、そういうのもなんか、楽しいよねっ。

「ていうか、結局普通に誘ってデートするんだから、あんまりサプライズ感ないわよね……」

「いいのいいの、大事なのは雰囲気！」

「……それもそうね」

勿論、新鮮な驚きも、いいけれど。

重要なのはそこじゃなくて、あたしたち二人が、一緒に楽しく過ごせるかどうかってところ。

「つてことで、まずは、服とか見るんだったよね」

「憶えてるじゃない。そろそろ夏物の季節だし、水着は今のうちから押さえておかないかね」

「そっかあ、みんな気が早いよね」

「そういうものなのよ」

「じゃあ……どっちが相手に似合うやつ先に見つけられるか、競争しよっか」

「いいわよ。あんたのセンス、試してあげるっ」

「うへえ、緊張する」

「ふふっ」

あーだこうだ言い合いなんかもしながら、一緒に服を合わせたりの、楽しいし、真優が楽しそうにしてるところを見るのも好き。

色々見て回ってる時の横顔も、その真剣な眼差しを向けてくれるところも、大好きだなって、思うよ……再確認したっ。

*

「どうだ、アイス三段重ね！ はいどうぞっ」

「ちよっと、あんたのはいいけど、私の分までこんなに盛らなくてもよかったのに……」

「真優が甘いもの食べたいって言うから、気合い入れたのに。このアイス、すっごい



おいしいんだよ？ 超おすすめ！」

「もう、食べるけど……全部違う味なんだから、そっちもひとくち、ちょうだいよね」

「わ、食べさせあいっこ。定番だよね」

「別に、だからってわけじゃないけど……」

とはいえ、せつかくのデートなんだし、やってみたっていうのはあるかも。

「あ、でも、間接キスになっちゃうけど、いいの？」

「気にしないわよ、間接なんて。そんなの、今まで何回してきてると思ってるのよ」

「え、えへ……そういう言い方すると、なんか、逆に恥ずかしいかも……」

「まったく……どうせなら、ホントのキスの時に、気遣いなさいよねっ」

「えっ、んもー！ そういうのしれっと言わないでよー」

「え……？」

「ついでに言うと、やっぱり真優は、もっと素直に表情に出してもいいと思うんだよねっ」

「そんなこと言われても……」

「じゃないと、あたしがさ、ほら、なんか寂しいし……」

「……ふふ、そういうところは、単純なのね」

「え、そっかなあ……」

ちよつと唇を尖らせて、不服そう。でも、それはそれで、かわいいじゃない。

「……あつ、あそこの展望タワーに行ってみない？ 景色いいところで食べた方がおいし

いよ、きつと」

「まあ、そうね、いいかも」

照れ隠し、あんたも下手よね。

「あ、アイス、上につくまであたしが持つてようか？」

「大丈夫よ」

「そう？ 落とさないように気をつけてね」

「わかってる」

「じゃあ、ちよつと待って。はい、階段多いから、手つないで行こう」

「ふうん……ちゃんと、エスコートしてよね」

「うんっ」

だけど、私のこと、ちゃんと守ってくれちゃって……。

時々見せてくれるそういうところは、頼もしいんだから。

*



「はー、映画おもしろかったねー」

「そうね、前評判もよかったけど、それ以上に楽しめた気がするわ」

「なんか、あたしたちも魔法かけられちゃった気分だよー」

「確かに、あつという間に感じたわね」

「さっすが真優の見立てだったと思うな。最後のシーンとかグッときたし」

「まあ、それはそうかしらね」

「えへへ、またドヤってるー」

「なによ、いいでしょ別に」

「いいです」

「ふん……」

「あ……そろそろ時間かも」

「次はなに？」

「夜景が綺麗に見える展望公園、この近くにあるんだ。この時間だと、夕日も綺麗なんだから」

「ふーん。あなたにしては、なかなかいい選択じゃない」

「えへへ。あとは、美術館とか水族館とか、色々考えてただけだねー」

「安直ね」

「えー、だって真優、綺麗なもの見たいでしょー」

「ええ。だから嬉しい」

「ホント？ よかったっ」

「何気なく、また二人で微笑みあつて。」

互いに手を取り、歩き出す。それだけで、なんとなく足取りが軽い。

もつと次の場所に、新しいどこかに、一緒に歩いていきたいなって気持ちが、どんどん大きくなる。

こうして真優と、楽しい時間を過ごすのに、魔法なんていらなんだよね。

*

「へえ……ホントに綺麗ね、ここからの景色……」

「うん……そだねえ……夕日、ちよつと眩しいけど……」

真衣と肩を寄せ合つて。公園の木々に囲まれたベンチに、腰掛けて。

それからしばらく、お互いに無言のまま。ちよつとだけ、指先に触れて、少しずつ、絡め合つて。

夕日に照らされた遠い町並みの情景が、ゆつたりと夜へ移ろうのにあわせて、穏やかに時間が過ぎていく……。

「……なんか、こうしてるの、好き。真優だからかな」

「……真衣だから、好き。なんだと思う」

「んへへ……」

「もう……ふふっ……」

特に意味のないやり取りまで、なんだかとても愛おしい。そんな気分。

「ねえ、真優……」

「なに……?」

「もう少し、そっち寄つていい? ちよつと、肌寒くなつてきたかなうって」

「平気よ……」

「まあまあ、そう言わずにさ」

夕日のせいなんだか、照れてるんだかよくわからない横顔を寄せるみたいに、構わず寄り寄ってくる。

そんなの、ダメなんて言えないじゃない……。

「んもう、近い……」

「いや、ほら、こういう雰囲気だし……なんか、チャンスだ! つて思つて」

「別に、そういうのなくても、傍にいてくれていいけど」

「そう……? そっか……」

「そうよ……」

それから、また二人して無言になつて。

夕日が少し、傾いて。

小さな逡巡の、間があつて。

まるで、世界に私たちしかいないみたいな空気の中で、わずかに視線を引き合わせれば……。

「……キス、していい……?」

「……っ」

なんでもないふうを装つたり、少し冗談めかしたりするくせに、こういう時の真衣は、いつも私に対して真剣だから。余計に、ドキツとする。

「……えつと……サプライズ……びっくりした……?」

「べ、別に、そうでもないし……」

「そっか……」





「……だめだったら、だめって言う……」

「んふっ……ハードル上げるね……」

「苦手な競技……?」

「んー……どっちかって言うと、得意な方かも」

「そ……」

まあ、そういう、無意識に先に立って手を引いてくれる、みたいなところ、知ってるし、好きだけど。

「ん、ほら……」

「うん……真優……目、閉じててね……」

「言わなくても、いい……真衣……」

「うん……」

景色にあわせて、時間の流れが遅くなったかのように、ゆっくりと。

そっと伏せられた互いの視線が、見えない視界の中でもぶつかりあって。

もうほとんどなかったような距離が、ついには合わかり、ゼロになる……。

「……んっ……」

「……ちゅ……っ」

吐息と吐息が溶けあったその先で、ふわりと感じる、他の何かにはたとえられない熱っぽい感触。

あたたかさを受け止めているような、柔らかさに受け止められているような。

優しい気持ち、伝えあって、受け取りあっているような。

愛しさを、直に囁きあっているような。

「ん……んふ……」

「んう……」

言葉を忘れて、触れあうことだけ考えて。

深く寄り添って、合わさって、繋がって、一つになって、確かめる。

こんなに近くにいるんだって、わかるのに。互いの輪郭がはっきりしてるんだか、曖昧なんだか、わからなくなっていくみたい……。

「ん……っ」

「っ……はあ……」

「もう……やっぱり、長い……」

こうして近づく度、離れられない、もっと近くにいたいって、思っちゃう……。

「……でも、まだ、欲しい……?」

「別に……っ」

「真優のそういうの、わかっちゃうんだな……」



「あんたの方が、そう思ってるんでしょ……わかるわよ……」

「えへへ……」

「ほら……もっと、ぎゅってして……」

「うん……」

「……あったかい」

「そだね……」

あれこれ言い繕う必要なんてなくて。

素直なまま、伝えて、素直なまま、感じあう、この雰囲気。これ、好きなんだって。何も考えなくても理解する。

「もう、どうしてくれるのよ……離れたく、なくなっちゃう……」

「大丈夫だよ。これからだって、ずっとこうしてられるんだもん」

「……そうね。絶対、離さないから」

「うん……あたしだって」

そうして、鼻先や頬が触れあうような距離で見つめ合ったまま、手探りで触れた指先を、もう一度絡め合う。

何年も一緒にいて、見て、触れてきたはずなのに。こんなに近くにいても、まだ足りないって感じちゃう。

これからもそうしていくんだってこと、疑う気持ちなんて、欠片も見当たらないっていうのよね。

「……なんだったら、さ。明日も、デートとか……?」

「別に、いいけど……毎日してるみたいじゃない……」

「してるみたいなものだよ」

「まあ、そうかもしれないけど……」

「えへへ……」

「もう……ふふっ」

二人でいれば、二人の時間は、いつまでも続く。そういうこと、なのかしら。

*

すっかり暗くなった公園の夜道を、街灯に照らされてゆっくり歩く。

「……………」

寄り添いあって、ぼんやり景色を眺めながら、なんでもない時間を過ごすついでに、帰



り道。

「……………」

すぐ隣で、肩に触れる柔らかさ、髪の毛の匂い、あったかき。それがそこにあるっていうだけで、心地いい。

一緒に過ごせば過ごすほど、強く意識して、特別に感じるようになっていく。お互いにそう思っていて、お互いにそれを受け入れて。

やっぱり、他の誰でもない、自分たちだから、それがいいって思えてしまう。

こういうの、つまり……。

「……幸せ、よ」

「えっ……！ ど、どうしたの、急に……」

「好き、とか、そういうの……やっぱり、ちゃんと買った方がいい、ちゃんと伝えた方がいいって、思っていて……」

「あ……うん……うんっ、そうだね！」

「せっかく傍にいるんだし」

「うんうんっ。真優の方からそんなふうに言ってくれるの、嬉しい！」

「さ、サプライズよ」

「え、そうなの？」

「ふん……冗談っ。やっぱり、お姉ちゃんだからね」

「なるほど」

こういうやり取りができるの、やっぱり世界中で、二人だけ。

それだけでも特別なのに、その上もっと好きになっていく。

そう思っているのが、私だけじゃないって、わかってて。それでもやっぱり、確かめた。言葉にして、伝えたいし、受け止めたいの。

「……真衣は、どうなのよ」

「あたしもだよ。嬉しい、楽しい、幸せ、大好きっ」

「いっぺんに言わないでよ……いいけど」

「えへへ……♪」

でも、ね……。

これからも、大切にしていきたいなって思える、この時間、このやり取り……。

他のなにもものにも代え難いって、そう思わせてくれる。

世界で一番近くに来てくれる、そういう相手でいてくれる。

私の名前を、誰よりも近い場所と呼んでくれる。

やっぱりそれが、嬉しいのよ、真衣。

……ありがとう。



*

あれから、家に帰って、お風呂に入ったり着替えたりしてる間も、なんだかちよつと、気持ちがあふわわしてて。

隣に、多分同じような気持ちなんだろうな〜っていう真優がいて。

どれだけ一緒にいても、やっぱり真優と一緒にいるのが一番楽しくて、嬉しいんだなって思う。

ああ、大好きな人と、一緒に過ごしてるんだなあ〜って、噛みしめちゃうよね。

「ねえねえ……おやすみのキストか、する……？」

「さすがに、甘えすぎ……」

「えへへ〜」

「……でも、今日は、楽しかったから……今日だけよっ」

どちらからともなく、そっと身体を寄せ合って。

あとはもう、わかってる。

「……おやすみ、真優。大好きっ」

「おやすみ、真衣……大好きよ」

重なって、触れあって、なんだか嬉しくなって、また触れあう。

くすぐったさをついばんで、今日の幸せを、抱き締めて。

明日からもまた、よろしくね、お姉ちゃんっ。

おしまい☆